

## 「出世、就職、人生」

昭和 48 年経済 絹田清昭

相談員になって4年半が経過した。ようやく色々なタイプの相談にも何とか対応できるようになってきたが、やはり日々反省があり何時まで経ってもよりベターな相談・助言を求めての試行錯誤が続く。一緒にやっている私より7年先輩の方も同じことを言われており、頭が下がる思いがすると同時に、どこまでも奥が深い仕事でもあるように感じている。以下、とりとめもなくであるが、これまでに気の付いたことなどを書き連ねてみたい。相談業務の難しさはどこにあるのだろうか？ 就職相談も広い意味ではカウンセリングの一環である。実際「エントリーシートの自己PRやガクチカ(学生時代頑張ったこと)の修正」などという明確な助言を必要とする相談や模擬面接などが大半であるが、「出世の意味は？」「なぜ就職しないといけないのか？」「人生がわからなくなりました」的な相談も交じる。数は少ないが、取り扱いが難しい。しかし相談センターの本質はむしろこういう学生のためにあるのだ、と思って正面から向かい合うようにしている。以下事例を紹介してみたい。

「出世の意味は？」最近の学生は上昇志向も強くなく、こういう質問も少ないのだが、聞かれたので以下対応した。大概是「収入が増える」「皆が敬意を払ってくれるので仕事がしやすくなる」「社会的評価が上がる」「やりがいのある(大きな)仕事を任されるようになる」というようなことが出てくるであろう。まさにそのとおり。先ずそういう話をした後で、ある知人の言葉を紹介した。

「地位が上がれば部下も権限も増える。影響を及ぼす人が多くなる。当然その人の人生に関わる度合いも増え、そこに責任が生まれる。それが偉くなる、出世するという意味だ。人を幸せにしたい、人の役に立ちたい、という気持ちがそこにはある。」と。

学生は「へえっ」という顔で聞いていたが彼なりに納得してくれたみたいだった。自分の価値観を押し付けてしまったかな？とは思ったが、まるっきり間違ったことでもない。世の中の人皆こう思えばパワハラ、なんて言葉もなくなるのに、とも思っている。今でも忘れられない言葉だ。こういう話では、学生に多様な価値観を提供し、学生個人に考えてもらう機会を作るために、恐れずに自分の言葉・考えを発信することも大事だと思っているのだが？

「なぜ就職しないといけないのか？」についてはこんな対応をした。

「結論から言うと、就職する・しないは最終的には個人の判断で良い悪いは言えない。しかし一般論を言うと、就職する(職に就く)ということは人生では自立を意味する。会社に勤めるだけが就職ではない。自分で稼ぐ、ことができて初めて生活が成り立ち、誰の支配も受けずに生活を営むことができる。これが自立につながり、社会の構成員として認知される。

加えて言うと、一日で一番いい時間帯に、通勤まで入れると10時間以上、農業をする人は早朝から日没までやはり半日以上を田んぼや畑で過ごす。また働く期間は20歳前後から70歳前後にまで及ぶ。80歳を超えてもまだ頑張っている人もいる。人生で一番活動的な時間であり年齢をどう過ごすかでその人の人生の値打ちが決まってくるように思える。大事なのはそこで生きがい、やりがいをもって仕事に取り組めるかどうかではないだろうか？なんでも働いて稼げればいいというものでもないように思う。」とまあ乏しい知識と経験からひねり出した人生観・就職観を学生に投げかけて反応を窺うことになる。

この手の質問をしてくる学生は、あれこれ迷っているだけの場合も多い。就職した方がいいのはある程度分かっているのだ。その上で背中を押してほしい、という場合が多い。この時もそうだった。私自身大学4年の就活時期に、もっと陸上競技をやりたい、就職したくない（社会に出るのが嫌だ）と思っていた。今で言うピーターパン症候群であったのだろう。ゼミの教授に相談したら「君は例え留年しても来年もまた同じことを言ってるよ」と一言で片づけられ社会へ船出した記憶がある。そんな話も交えて学生と雑談半分で語り合ったら、何か吹っ切れた表情で「わかりました、もう一度考えてみます」と言って帰っていった。その後会ってはいないが、今頃はどこかの会社で元気で活躍しているのだろう。50年近く経って忘れていた古傷が痛んだような気もしたが、そういう体験をしていたことで学生と向かい合えたことも確か。人生無駄なことなどないな、と感じた次第だった。

「人生がわからなくなりました」は深すぎる。キリストや釈迦や古今の哲学者たちが悩んだようなことを投げかけられても困るわけで、「出世の意味は？」「就職は必要か？」などとは次元が違う。自分は何となく70年生きてきた。この人生を他人にひけらかすなどできないし同時に卑下するつもりもないが・・・さて？

こういう時はひたすら話を聞き、学生の内面にあるものを引き出すように努める。共感しての傾聴が一番必要とされる場合だ。キャリアカウンセラーの勉強で訓練した傾聴だが、私の中に答えなどなく、答えはクライアントの中にしかない。学生に寄り添い共感しながら一緒に答えを見つけていく作業を重ねないといけない。傾聴しているフリをすることはできても、聞いてどうするのか？が問われるので、それこそ全身全霊を傾けて聴く必要がある。

「こうしてみたら？こうしたらいいのでは？」というようなセリフを吐きたくある時があるが「じっと我慢の子」である。忍耐のいる時間だ。

あまり忍耐強いほうではないので、自分としても難行であるが、一緒に時間を過ごすだけで少しほぐれてくるときもある。「自分がどうしたいのか？納得してから次へ行ったらいいよ。焦る必要はないから。」と負担を軽くするような助言はするが、相手が「具体的にどうすればいいですか？」と問わない限り、「OOしてみたら？」は言わないようにしている。時間が解決する話でもある。幸い学生は若くエネルギーに溢れている。一時の迷いで道がわからなくなっても、こういう時間が持てれば、そのうち自分で道を探し出してくるケースは多い。この手の相談は年に一人あるかないかだが、相談を受けたときは流石に緊張する。

学生の精神状態に不安を感じたときは、会社時代に知り合った精神科医、心理療法士などにつながつもりにしているが、まだそこまで行った事例はない。しかしこれも人助けの一環で、キリスト教的に言えば「神の与え給うた試練でもあり喜びである」ようにも思っている。

コロナで就活も大きく様変わりした。今年の就活生は学生生活のハイライトの3年生、を友人、恩師とも十分に触れ合えず時が流れている。「学生時代頑張ったこと」がどれだけできているのだろうか？私は学生運動のピークの1969年に入学したが9月まで授業がなく自宅待機だった。学生生活が3年半しかなく残念だったが、今の学生はコロナによる学生生活の制約をもう1年以上続けており同情に堪えない。一刻も早くコロナが収束し友人たちと触れ合える日々が戻って「ガクチカ」を思う存分できる日々が来ることを願っている。

以上